

機関番号：34416

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720015

研究課題名（和文） 東アジアにおける儒教の基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental studies of Confucianism in East Asia

研究代表者

城山 陽宣 (SHIROYAMA TAKANOBU)

関西大学・東西学術研究所・研究員

研究者番号：90535543

研究成果の概要（和文）：本研究は、東アジアにおける儒教を考える際に、その原点と末端、中心と周縁の双方に注意を払うことによって、中国・日本における儒教の展開と伝播を考察し、その本質を究明することを目指したものである。

まず、東アジア儒教の原点・中心研究では、日本中国学会大会の発表等において、董仲舒の対策文書に関する福井重雅氏の考証の方法に対する疑義を提起した。また、董仲舒対策第三策の「六藝之科・孔子之術」に対する新たな解釈を提示し、対策が当時の朝野にいかなる影響を与え、またこれがいかに漢代思想史に位置づけられるのかについても卑見を提示した。

次に「周縁的研究」では、清朝文化の日本への東伝という文化交渉の現象の中でも、とりわけ特徴的な一例である清朝の木活字出版「聚珍版」の東伝が日本の近世木活字の盛行をもたらした可能性について考え、清朝で生み出された木活字による出版を「雅馴」と見なす観念が、近世日本にも受容されていたことを確認し、中国を源流とする儒教思想が日本の社会へ受容されていったことと密接な関連があることが確かめられた。

また2010年からは、大阪を代表する漢学塾であった泊園書院に関する研究も行ってきた。

その第一弾として、藤澤南岳の蒐書思想を自筆稿本『名士九命草』の「藏書」を中心に解き明かすことを通じて、近代日本における民間の儒学・儒者の実態を明らかにすることを試みた。

次に、これまで全く手付かずであった藤澤東咳・南岳・黄鵠・黄坡先生の自筆稿本の目録の整理を行い、「関西大学泊園文庫蔵自筆稿本目録稿 一その(1)一」を提出した。以後自筆稿本目録完成まで順次発表していく予定である。

研究成果の概要（英文）：This study considered the Confucian development and spread in China and Japan, and aimed at studying the essence. When I thought about Confucianism in the East Asia, I paid attention to the both sides of origin and end, center and periphery.

First, in the origin study of East Asia Confucianism, I submitted a doubt for the method of the historical investigation of Mr. Fukui's paper about the Duice 対策 by Dong Zhong Shu 董仲舒 in the presentation of the Sinological Society of Japan. It also presents a new interpretation for the third of the Duice 対策 by Dong Zhong Shu 董仲舒, and showed a my opinion what kind of influence it had and how it was placed in history of Han periods thought.

Second, in the peripheral study, I took up tree printing type publication in the Qing

dynasty which was a characteristic example in the phenomenon of culture negotiations such the east biography from the Qing dynasty Culture to Japan. I thought about the possibility that east biography of “聚珍版” led to the rise of the tree printing type in the Japanese early modern times. As a result, I confirmed that an idea to consider publication by the tree printing type to be “雅訓” was received in the Japanese early modern times, and that close relation to Confucianism thought to assume China the source having been received to the Japanese society.

Third, from 2010, I studied it about “泊園書院” that was the Chinese learning school which represented Osaka.

At a first step, I tried that I clarified the actual situation of private Confucianism and the scholar of Confucianism in modern Japan, through solving book collect thought of 藤澤南岳 mainly on “蔵書” of handwriting original draft “名士九命草”.

Then, I arranged the list of the handwriting original draft of 藤澤東咳, 南岳, 黄鵠 and 黄坡 which was not studied at all till now. I am going to announce it to handwriting original draft list completion sequentially in future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：東アジア思想文化史

科研費の分科・細目：中国哲学

キーワード：中国哲学、東洋史、書誌学、中国文学、儒教、比較文学、日本思想

1. 研究開始当初の背景

(1)、中心に着目すれば、その本質を見失うこともあるが、周縁のみに依拠すれば、本質を遠く離れることにもなる。

例えば、我が国における江戸儒教の研究には、周縁の特殊事情のみに依拠してしまったために本質より遠く離れてしまったと言えるのではなからうか。

江戸期の儒学においては、官学の地位を獲得した朱子学とそれを超越することを目指した古学諸派が、時に対抗し、時に論争を重

ねることにより、大いなる思想的果実を我が国の思想史に遺してくれたといえるであろう。

確かに、このようにして確立された江戸期の儒学は、日本固有のものである。現在の我が国の江戸儒学研究が、江戸期の事象のみをその研究対象としているのも、一方からみれば至極当然で、大いに頷けるのであるが、一方では、視野を東アジアの儒教という範囲を広げた観点も求められていると考えられる。幸いにも、こうした取り組みは、朱子学の研

究者の一部に連綿と受け継がれてきているのであるが、残念ながら、我が国の研究界の主流には、儒学という儒教の学術部分にのみ拘泥する嫌いがあるように思えてならない。つまり、我が国の儒学研究は、いささか視野狭窄に陥っているとも言える状態であると考えられる。

(2)、そうした、我が国の研究動向をしり目に中国・台湾における日本儒学研究は、充実の一途を辿っている。

例えば、我が国に翻訳された『東アジアの儒学—経典とその解釈』の著者である黄俊傑氏は、その先頭を走る一人といえるであろうが、他のどの研究にも共通しているのは、東アジアという巨視的な観点のもとに、日本の儒学と中国・朝鮮の儒学を比較検討したものであるということである。申請者の目から見て、こうした点で我が国の儒学研究はいささか見劣りのするものとなっているように感じられるのである。

(3)、だが、中国・台湾における儒学研究者には、儒学という学問だけを研究対象とすることに拘泥するのみで、東アジアの習慣・文化そのものとも言える「儒教」を軸に、地域的な文化的差異を比較・検証していく視点が欠けているのも否めない事実である。

なぜなら、もともと、「東アジア世界」という学術用語が我が国の西嶋定生から生み出されたことから理解されるように、中国・台湾地域の学者には「中華世界」の観念はあっても、東アジアに異なる文化が共存するという観点を欠いていたためことも一つの理由であると考えられよう。

また他に、中国・台湾地域では、「儒学」の用語が広く認知され、より広義な「儒教」という用語がそれほど認知されていなかったという点が指摘されている。ならば、彼らの注意が儒教の学問面「儒学」だけに向く結

果となるのは必然であり、儒教という東アジア地域の社会や文化の隅々まで広範に影響を与えていた観念を認識する視点が欠如してしまっていたことも、またやむを得ない帰結であった。

(4)、以上、我が国や中国・台湾の学術界の東アジア地域の儒教研究に対する問題点を通観するに、国境を超え、異なる文化圏にも伝播していた「東アジアの儒教」に対する研究を行う必要があったのである。

## 2. 研究の目的

(1)、本研究では、「儒教」という社会・文化全体に影響を与えた広大な観念に依拠し、そこに内包される学術的・思想的問題点を文化交流の観点をもとに検討を加えることによって、東アジア儒教の本質を体系的に捉え直し、また、その過程で、中国及び日本の文化に儒教が如何に影響を与えたのか、ひいては、儒教とは何かを解明することを目指すものである。

## 3. 研究の方法

(1)、本研究では、儒教が国教化された前漢代の儒教研究を「中心的原点的研究」とし、儒教が社会の様々な方面に影響を与えていた清代の儒教や江戸期の日本儒教の研究を「周縁的研究」と見なして、「内」と「外」、「本」と「末」の双方より実証的に検討を重ね、東アジアにおける儒教を体系的に究明する。

(2)、具体的には、まず、「儒学」という狭い概念で考えるのではなく、「儒教」という社会・文化全体に影響を与えた広大な観念に依拠することが必要である。

(3)、また、地域的な比較軸による中心と周縁の関係に着目するだけでなく、これまで、注意されてこなかった時間的な比較軸による原点と末端の検討も併せて行うことによ

て、そこに内包される学術的・思想的問題点を、文化交流の観点をもとに検討を加えることによって、東アジア儒教の本質の究明を目指したのである。

#### 4. 研究成果

(1)、本研究は、東アジアにおける儒教を考える際に、その原点と末端、中心と周縁の双方に注意を払うことによって、中国・日本における儒教の展開と伝播を考察し、その本質を究明することを目指したものである。

(2)、まず、東アジア儒教の原点・中心研究では、日本中国学会・第六十二回大会において、「董仲舒対策の真偽説の再検討」と題する発表を行った。本発表では、董仲舒の対策文書に関する福井重雅氏の考証の方法について検討を行い、漢代思想史における董仲舒対策の位置付けについても言及した。

(3)、また、本年度の三月の日本中国学会第一回若手シンポジウム「中国学の新局面」において、「董仲舒対策とその周辺」と題する発表を行なった。董仲舒によって対策が行われた時期の周辺状況を、諸博士や五経博士の実態と武帝即位直後の今文・古文学派と諸子の状況を考察することを通じて、董仲舒対策第三策の「六藝之科・孔子之術」に対する新たな解釈を提示し、対策が当時の朝野に及ぼした影響を与えたかについて検討を加えた。これらは、近日中に何らかの形で論文として公開する予定である。

(4)、次に「周縁的研究」では、清朝文化の日本への東伝という文化交渉の現象の中でも、とりわけ特徴的な一例である清朝の木活字出版「聚珍版」の東伝が日本の近世木活字の盛行をもたらした可能性について考えた。

清朝で形作られた「聚珍版」の「雅馴」という独自の観念が我が国に伝えられ、受容されたことは、すでに定説となっているが、そ

れがどの程度、どのような形で受容されたかについては、いまだ議論をされたことがない。

そこで、本報告「聚珍版」の東伝と我が国の近世木活字出版文化の形成」では、我が国に伝存する近世木活字の版本や江戸時代末期の文章より「聚珍版」の用例とその観念を直接確認した結果、「聚珍版」に関する多数の用例が発見され、清朝で生み出された木活字による出版を「雅馴」と見なす観念が、近世日本にも受容されていたことが確認されたのである。

こうした事例は、中国を源流とする儒教思想が日本の社会へ受容されていったことと密接な関連があり、今後注意を要すると思われる。

(5)、また、東アジア儒教の末端・周縁研究では、大阪を代表する漢学塾であった泊園書院に関する研究を中心に推し進め、日本における儒教の伝播と展開の一面を検証することによって、東アジアにおける儒教の原点と末端、中心と周縁を明らかにし、その本質を究明することを目指した。

(6)、その第一弾として、「明治初期における泊園書院の学術 ―自筆稿本資料を中心に―」と題する発表も行った。江戸末期から大正までの激動の時代を駆け抜けた藤澤南岳は、大阪の学問の顔であり、その実力は、東京帝国大学の教官に招聘されるほどであった。しかし、今日の藤澤南岳に対する研究はまことに寂寞たるものである。本発表では、藤澤南岳の蔵書思想を自筆稿本『名士九命草』の「蔵書」を中心に解き明かすことを通じて、近代日本における民間の儒学・儒者の実態を明らかにすることを試みた。

(7)、次に、その泊園文庫の自筆稿本の目録の整理を行い、「関西大学泊園文庫蔵自筆稿本目録稿 ―その(1)―」を提出した。筆者は、これまで全く手付かずであった藤澤東暎・南

岳・黄鹄・黄坡先生の手稿の整理に着手しており、本稿はその第一弾で、以後自筆稿本目録完成まで順次発表していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 城山陽宣、関西大学泊園文庫蔵自筆稿本目録稿 ―その(1)―、東西学術研究所紀要(和文)、査読無、第44輯、2011、pp. 55～89
- ② 城山陽宣、「聚珍版」の東伝と我が国の近世木活字出版文化の形成、アジア文化交流研究、査読無、5号、2010、pp. 399～422

[学会発表] (計4件)

- ① 城山陽宣、董仲舒対策とその周辺、日本中国学会第一回若手シンポジウム「中国学の新局面」、審査有、日本中国学会、2011. 3. 26、東京大学 本郷キャンパス 法文1号館2階215教室
- ② 城山陽宣、董仲舒対策の真偽説の再検討、日本中国学会第62回大会、審査有、日本中国学会、2010. 10. 9、広島大学文学研究科 B251教室
- ③ 城山陽宣、幕末明治初期における泊園書院の学術 ―自筆稿本資料を中心に―、関西大学 東西学術研究所 明治思想文化研究班研究例会、審査無、関西大学 東西学術研究所、2010. 5. 22、関西大学 児島惟謙館2階 第2会議室
- ④ 城山陽宣、江戸時代における木活字版の再盛行とその周辺、アジア文化交流研究センター 思想・儀礼研究班 第27回研究例会、審査無、関西大学 アジア文化交流研究センター、2009. 9. 11、関西大学 以文館3階 プロジェクト(2)研究室

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

城山 陽宣 (SHIROYAMA TAKANOBU)  
関西大学・東西学術研究所・研究員  
研究者番号：90535543